「喜びにあふれて」（ルカによる福音書一〇章一七～二四節）

1　七十二人、帰って来る

七十二人の派遣。ルカにだけ伝えられている話ですが、二回に分けて学んでいます。今日はその後半です。

ところでこの「派遣」、あるいは「遣わされる」という言葉、これは私ども、教会のことを考える上でも、信仰のことを考える上でも、きわめて大切な言葉、また事柄であることは言うまでもありません。

教会は神によって集められ、神によって、とり分け聖霊の力においてつくり上げられます。しかしそれだけではありません。教会は世に遣わされます。世に福音を宣べ伝えるため、イエス・キリストを証しするために、遣わされます。集められ、つくり上げられ、そして遣わされる、このダイナミックな循環の中に、生ける教会は存在します。

教会がそうであることは、私どものこの礼拝にも反映しています。招きの言葉によって私どもは集められます。聖書の言葉とその説き明かしをもって養われ、つくり上げられます。そして祝福をもって（祝祷）、この世へと主の証人として送り出されます。送り出された私どもは、また礼拝へと戻ってきます。ここにもダイナミックな循環があります。そしてこの生命的な循環にあずかることで、私どもの信仰もつくり上げられていくのです。

さて今日の箇所、七十二人の派遣の後半です。遣わされた七十二人が、イエスのもとに帰ってきます。

> 七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します」。イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。しかし悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」（一七～二〇節）。

今日の聖書箇所を読んで、何より私が印象深く思ったのは、「喜ぶ」という言葉が何度も出てくることです。いま読んだところにも、三回出てきます。「喜んで帰ってきて」「喜んではならない」そして「喜びなさい」です。さらに、これは後で取り上げることになりますが、二一節に、イエスについて、「喜びにあふれて言われた」とあります。

これまでも、この福音書、むろん何度も「喜び」が出て来ました。その中で私どもすぐ思い起こすのは、クリスマスのときのことではないでしょうか。野宿していた羊飼いに、突然まばゆいばかりの光と共に現れた天使はこう言います。「恐れるな。わ

たしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」（二・一〇）。福音です。この福音という言葉も、ご承知のように、そもそも〈喜びの知らせ〉の意味です。福音とは恐れと不安から解き放たれること、いや、それ以上です、たとえ恐れと不安の中にあっても、そこにも神がいてくださる喜びです。

しかし今日の箇所の最初のところに出てくる「喜び」、七十二人の喜びは、いま言った福音の喜びというのとは、少し違うようです。イエスの「お名前を使うと」悪霊もわれわれに屈服した。それはある種の快感のようなものだったのでしょう。それゆえイエスは、それは喜ぶようなものではないと諭されます。それなら本当に喜ぶべきこととは何でしょうか。

このイエスに遣わされた七十二人、イエスの名によって悪霊が出て行く、そういう場面に何度も遭遇したようです。それはとても嬉しかった。しかしそれだけではなかったはずです。福音が拒絶され、受け入れられなかった、惨めな思いも、彼らは何度も経験したのです。

そのとき彼らは、意気消沈してしまって、心の中にある喜びも、なくなってしまったのでしょうか。そうではなかったはずです。それなら、その喜びとは、いったい何でしょうか。それは、こんなわれわれでも、イエスは救ってくださった、見込みありと見なしてくださった、遣わしてくださったという思いです。私どもは、私どもの「名が天に書き記されていること」を喜ぶべきなのです。この救いの喜びに私どもも、そして教会もあずかりたいと願わざるをえません。

2　喜びにあふれて

今日の聖書箇所、小見出しが二つあって、それぞれの部分が独立しているように見えますけれど、密接につながっています。

そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません」（二一～二二節）。

「そのとき」は「まさにそのとき」、あるいは「同時に」と訳されてもいい言葉です。七十二人が戻ってきて、彼らの経験したことを聞いているうちに、イエスはあふれる喜びに満たされたのです。

この喜びは、人間的なものではなく、「聖霊」によるものでした。この喜びは、七十二人の、あの最初の喜びと同じだとは言えないかも知れません。それにしても、イエスが聖霊によって喜びにあふれて語り出す、あまり例のないことです。もし同じような場面を上げるとすれば、受胎告知を受けたマリアが神を喜びたたえたということがあります。

ここでイエスが口にしたのは祈りでした。神の子イエスの父なる神への祈り、彼は父なる神をほめたたえます。

この祈りによって、イエスの心のうちが、そこにいた七十二人にも、そして聖書を通して私どもにも、明らかになります。イエスは心から喜びにたえないのです。それは御父と御子との思いが一致したからです。福音が、知恵ある者や賢い者には隠され、むしろ幼子のような者に啓示された、それは父の御心にかなうものでしたし、御子の思いそのものでした。

マリアも同じように神をほめたたえていたことを思い出します。マリアも、神が思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く引き上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返される、それゆえに神をあがめ、喜びたたえたのです（一・四六以下）。神の国は近づいた。イエスにおいて、神の国が、神のご支配が、神の御心がなっています。七十二人の派遣とその宣教の中でもそれは明らかになったのです。

こうした神の救いは、使徒の教会を通して、私どもにまで引きつがれています。よく知られたパウロの言葉を引いておきます。

> 兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけでもなく、能力のある者や、家柄のよい者が多かったわけでもありません。・・・神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前に誇ることがないようにするためです（コリント一、一・二六～二九）。

イエスの告げた神の国、それはイエスのガリラヤ伝道を通して、明らかになりました。それは、神ご自身が、知恵ある者・賢い者ではなく、幼子のような者に、富める者ではなく、貧しい者に、満腹している者ではなく、飢え乾いている者に傾いていることを明らかにしたのです。それが使徒の教会に受け継がれました。

3　教会の光栄

さて帰って来た七十二人を迎えて神をほめたたえ祈ったイエスは、今度は、その「弟子たちの方を振り向いて」（二三節）、こう言われます。

> あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ。言っておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いている者を聞きたかったが、聞けなかったのである（二三～二四節）。

ここで「あなたがた」と言われているのは、もちろん弟子たちのことです。ここには、七十二人も含まれます。

先にイエスは、神が、その福音を、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような

者にお示しになったことを、喜びをもって受けとめました。

ここではイエスは、福音を、多くの預言者や王ではなくて、弟子たちが耳聞きし受けとめたことを喜んでいます。

先ほどの箇所、二二節に、こういう言葉がありました。「・・・父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません」。つまり「子が示そうとした者」も、御子イエスと共に、父を知ることができるということです。この中に、弟子たちが入っていることは明らかです。そしてここに、弟子たちの選びがあり、光栄があるのです。

多くの預言者が、あるいは王が、見ようとして見られなかった、聞こうとして聞けなかった、それを見、かつ聞くことができる、それはどれほどの光栄でしょうか。それゆえ弟子たちは「幸いだ」と言われます。七十二人を含む、世に遣わされた弟子たちの光栄です。それは、神の選びにあずかった者たちの光栄であり、それゆえ教会の光栄ということです。

もちろん、私どもが、何かその力において、その性質において、選びに値したというのではありません。パウロが書いていたように、無に等しい者、貧しい者が、そのために選ばれたのです。

それにしても彼ら弟子たちは、そもそも何を見、聞いたのでしょうか。何を見、聞くことを許されたのでしょうか。

それは、神の国が来たということです。イエスの名において悪霊が追い出され、いやしがなされ、貧しい人々に福音が届けられているということ（七・二二以下）。神の支配、その恵みが、メシア（キリスト）であるイエスにおいて現実となっているということです。それを見、かつ聞いた。預言者も王も、それを予感することができても、見、聞くことはできませんでした。

この救いを「見た」人として、私どもは、老シメオンを思い起こします。覚えておいでだと思いますが、生まれて一ヶ月のイエス、神に捧げられるために、ヨセフとマリアにいただかれて神殿に来たイエスに、シメオンは出会います、それも聖霊の導きでした。彼は敬虔で信仰あつく、メシアに会うまで決して死なないとお告げを受けていたような人です（二・二五以下）。

シメオンは、幼子イエスを腕にいだき、神をたたえて言います。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです」。まさにこのシメオンのように、弟子たちも、選ばれてイエスと共に歩み、宣教に遣わされて、まさに救いを「見た」のです。それはどんなに光栄なことであったでしょうか。

いま弟子たちは、イエスと共にエルサレムへと旅をしています。イエスはメシアとして十字架にかけられます。それは彼らにはきっとつまずきです。神の永遠の国はなおはるかです。困難があります。意気消沈することもあるでしょう。でも、このメシア、キリストであるイエスを彼らは間近に見、そして聞き、歩んで行きます。こうして彼らが救いを「見た」ということ、そのことが、イエスの十字架を越えて、信仰に固く立って歩みつづける力となったのです。

（二〇二一・一〇・一七）